

Reborn

Vol.6 2018冬号

【特集】明日へつなぐ

Take Free

.....
ご自由にお持ちください



社会医療法人ましき会
益城病院
MASHIKI HOSPITAL

Contents

巻頭の書「明日へつなく」	1
新春医局座談会	2
こころと心のミュージアム「書二人展」	6
明日へつなく院内学会	8
地震災害と感染対策の体験から	9
この頃つらつら	10
岩宮恵子先生による継続的な心理支援	11
講演会「震災後の心のケアについて」を開催して	11
災害拠点精神科病院機能訓練に参加して	12
緊迫した空気の中、真摯に取り組んだ災害訓練	13
クリスマスバイキングの裏側に潜入！	14
PLAN2020 Cチーム・職場インフォメーション	15
研修と院内勉強会	16
病院情報・OFF TIME	17

益城病院 基本理念

社会医療法人ましき会は、患者さんとそのご家族に対し
最善のプロフェッショナルサービスを提供し、
精神科医療の責任ある担い手として、地域の医療・福祉・文化に貢献します。

五つの 誓い

1. 私達は、精神科医療を通じて社会貢献に努め、
社会医療法人としての公益的使命を果たします。
2. 私達は、こころを病む人々に対し、尊厳を損なうことなく、
心身の健康づくりに努めます。
3. 私達は、こころを病む人々が、
地域で安心して暮らせる環境づくりに努めます。
4. 私達は、お互いの立場を尊重し、働きがいのある職場づくりに努めます。
5. 私達は、医療の質を高めるため、日々、自己研鑽に努めます。

患者さんの 権利と義務

1. すべての個人情報を守られます。
2. 医療上の情報について十分な説明を受けることができます。
3. 医療行為について自ら選択することができます。
4. ご自身の負担で、他の医療機関の医師の意見を聞くことができます。
5. いかなる場合も人格的に尊重され、平等な医療を受けることができます。
6. 適切な医療のために必要な情報を伝え、主体的に治療に参加してください。
7. 病状の改善及び共同生活を維持するため、規則や指示を守ってください。
8. 医療にかかった費用を支払う義務があります。

つなぐ 明日へ

地震により全壊した益城病院。
大きな支援を忘れず胸に抱き、
復興に向け一人ひとりが思い描いた挑戦を
力強く明日へつなぎます。

書 坂倉 蓉飛



新 春 医 局 座 談 会



明日へつなぐ

～災害を乗り越えて、精神医療のこれから～

2018年の新春にあたり、
益城病院の今と未来を語り合う医局座談会が開かれました。
熊本地震からの復興途上という厳しい現実の中にも
希望の芽を探り、より魅力的な病院へと生まれ変わろうとする
病院の今後を展望する場となりました。



座談会列席者

医局長 鮫島 峰子、副院長 渡邊 信夫、理事長 犬飼 邦明、院長 松永 哲夫、診療部長 宮崎 知博、

司 会：法人事務局 次長 宮崎 翔

進 行：堀地 久美子



司会：2019年春竣工を目途に、今年の春には病院の移転新築が着工となります。PLAN2020では、スーパー救急取得や病棟のユニット化、精神科災害拠点病院に向けての取り組みなどを進める予定です。また、国の医療政策による在宅移行促進が加速し、病床削減や有料老人ホームなど住まいとしての施設転換、地域包括ケアなどが求められてくるでしょう。m-ECTやクロザピンといった医療の導入も視野に入れ、看取りなどを含めたこれからの精神科としての役割を考える時期が来ているように思いますが、いかがでしょうか。

渡邊：私がこの益城病院に来てもうすぐ半年になりますが、認知症がとても多いという印象を受けました。特にへき地ではかなり進行している例が見られます。今後の役割として、m-ECTやクロザピンの準備を進めています。新しい医療を取り入れる時は色々苦労が多く、スタッフの協力が欠かせませんが、治療が長期化してなかなか成果が出なかった患者さんが良くなると、士気も上がります。これを機に、若い医師が精神科に興味を持ってくれたり、研修もできるような病院を目指せればと思います。

犬飼：1950年代から、精神科は収容を中心に進んできました。精神科疾患という特殊性から入院中心になりやすく、長期にわたって多くのベッド数を必要とするというのが一般認識でした。それが、1980年代半ばから変わってきました。当院では、1998年から精神障がい者福祉を手掛けてきました。人口減と人材確保が困難になる中、地域で支えるには、社会にその機運が育ち、政策予算も必要になり

ます。自分たちにできる事とできない事を見極めながら、精神科としての専門性を活かし、取捨選択してやっていきたい。認知症に関しては、この10年、益城病院は熊本モデルのセンター的な位置づけとなっており、今後也需要は増え続けるでしょう。

松永：渡邊先生に来ていただいたおかげで我々にも余裕ができ、新しい取り組みへの意欲が出てきたのは嬉しいことです。アルコール依存症に関して言えば、来年、熊本県がアルコール基本法に基づく基本計画を作成します。また、災害復興の一環として、アルコールの相談窓口に益城病院からも相談員が派遣されています。

鮫島：私事になりますが、3年前から認知症の父を抱え、娘の出産も重なりました。介護の経験は仕事に役立ち、また、介護を続ける上で仕事が自分を支えている部分もありますが、地震の混乱が未だ収まらない状況で頑張っている職員にとっては、家庭と仕事の両立が何よりも大きな課題だと思います。病院が急激に変わろうとする中、スタッフが疲れないような、忙しさのしわ寄せが来ないような体制づくりを考えておきたい。今の新しい流れを理解してもらいつつ、モチベーションを維持したいですね。

松永：どうすれば仕事のモチベーションが上がるかというところ、いろんな目標を設定することも大事ですが、いかに自分がやった仕事が周囲に受け入れられ、どのような反応があるか、だと思います。地震の後は、仕事の変化について行けないで疲れている人もいます。

鮫島：今までで一番の変革期です。家庭が安





定していないスタッフもいますから、仕事上の立ち位置と公私のバランスを常に見ながら、接していく必要があると思います。

犬飼：災害復旧が一段落した後の新たな創生を復興と言うのでしょうか。そもそも、将来ビジョン計画は地震前から予定していたもので、PLAN2020では、全くの新規事業はあまりないんです。医療に携わるスタッフも患者もほぼ変わらない。新しいハードの中で、何をどう創り出せるかということです。益城病院スタッフは、ある意味、全員が被災者です。地震がなければ維持できていた生活が、急に失われた。「専門家だから乗り越えられて当然」ではなく、精神的動揺や生活の変化は、まだまだ油断できない状況にあると思います。

松永：自分たちの病院が何とか生き残れるようにと、無理して頑張ってきたことによる後遺症があるんじゃないかと思うんです。そんなスタッフにとっては、「さあジャンプアップだ、新しい所に羽ばたくぞ」というより、これまで練り上げてきたものを、今までと同じようなイメージで出していくのがいいんじゃないでしょうか。病気の回復と同じで、身の丈の自分を肯定できる健全な自己愛とか、一緒に泣き笑いできる情緒的な絆、多面的な見方から生まれるユーモア、「今できる事をやっていけば何とかなるさ」という楽観主義が、“レジリエンス”復元力につながっていくと思います。

宮崎：アドバルーンを上げるなら、それがちゃんと地面につながっていることが大切です。地に足が着いたビジョンじゃないと…。そのために必要なのは人材でしょう。m-ECT

にも麻酔科の医師が必要のように、今後、みんなが疲れず仕事を続けるには、精神科だけで固まらず他科の医師を受け入れる必要があるでしょう。社会の高齢化に伴いスタッフも患者も高齢化し、従来の家族制度が崩壊する中、燃え尽きないようなシステムで社会を支えていかなければなりません。

犬飼：2019年に新病院が竣工し、2020年には新体制でのスタートになります。20年前、今の病棟ができた時にはこれまでの精神科のイメージを覆し、“益城ショック”と言われました。県内外に衝撃を与え、その影響で、スマートできれいな精神科病院が増えたそうです。これからは中身ですね。「病院が患者さんのためにできること」を考え、足元を固めていく必要があります。

宮崎：ここ最近、やたら忙しいのは事務仕事が多いせいかな、と思います。秘書が書類の8割くらいは作ってくれるので回っています。

松永：秘書がいるから助かりますよね、他所に比べたら恵まれています。

犬飼：一人の医師が診る患者数では、松永先生が圧倒的に多く次が鮫島先生と、偏りが大きいのも気になります。これから新しい人材を増やし、質と量の問題を担保しながら、どうシェアリングしていくかも重要課題です。

司会：AIが導入されれば、だいたい医師の事務負担は減るかもしれません。他科では、ビッグデータをもとに治療方針を立てるというのも始まっています。主治医しか診れない外来を見直して、一人が抱え込まず助け合えるシステムを考えることが大事になってきます。

犬飼：9人の医師というのは決して少ない数





ではないんですが、業務量が増えました。一人ができる範囲は限られるので、取捨選択も必要ですね。それから、どうやって新たな人材を呼ぶか。鮫島先生が言われるように益城病院に魅力が足りないとしたら、職員が誇りを持てる病院になるには、どうしたらいいか？

鮫島：子ども診療室の先生が辞められた時、引き留められず無力感が大きかったんです。私は益城病院との長年のつながりを有難く思っていますが、「つながりを信じていた先生が、なぜ辞めて行かれるのか？」と考えた時、ふと、そういう言葉が出たんだと思います。これから、もっと一人ひとりと向き合い、患者さんだけでなく職員の声が届く関係を作っていかなければと思っています。

宮崎：いい医師がいて、ずっと残ってくれる病院は、やはり何か魅力があるんでしょう。若い医師にとっては、資格が取れる病院であることも大きいかもしれません。益城病院の強みという点でいえば、スタッフは優秀ですね。看護師、秘書、施設の人たち…みんなに支えられて、やれています。

渡邊：益城病院は、他の病院と比べるとオープンな雰囲気だと感じます。ここに来て、医局会での会話やスタッフ同士の情報交換が盛んなのが、新鮮な驚きでした。周囲から見てもわからない、こういう何気ないところが、益城病院の一番の良さでしょう。若い医師も働きやすい病院だと思うので、もっと外にアピールしていけたらと思うんですけど。

松永：渡邊先生が来られてからですよ（笑）

鮫島：ここ1年程、医局会と勉強会をつなげて、現場で困っている事を相談し合える症例

検討会を開いてきました。外から研修医も来られますし、コメディカルも参加すれば、もっと面白くなるんじゃないかと思います。

犬飼：そういえば、認知症の事例検討会も熊本地震の前から始めていたんですが、地震後、少し余裕がなかったですね…

宮崎：昨年12月には、認知症初期集中支援についてPSWの福島さんが発表しました。地震後、トラック内で寝泊まりしていた夫婦がいて、奥さんの方を、週1回迎えに行ってお風呂に入れ、送っていくという支援活動が続けてきたケースです。入院を勧めたが断られ、そういう形で生活面もカバーすることになった。息子さん夫婦には感謝されました。

犬飼：面倒見の良さは、うちの特性ですからね（笑）

松永：悪く言うと抱えすぎかもしれませんけど（笑）

宮崎：見た以上、放っておけないと思うスタッフがいたということです。

犬飼：「誰かが診（看）らないかんだろうもん。そんなら診（看）よう」という姿勢がある。

鮫島：私は現実的な事しか考えていないですが、やはり、スタッフに支えられてここまで来れました。実際に動くのは、いつもスタッフ。どんな大変な思いで頑張っているか、常に忘れずやっていきたいですね。

渡邊：私は、まだよくわからないことが多い、看護師さんとの関係がようやく掴めてきたところなんですけど…理想としては、みんなが気持ちに余裕を持てて、ちょっと困ったら相談し合いながらやっていければ、患者さんとの接し方にもゆとりが生まれるんじゃないかと思っています。

犬飼：色んな事を見直して、生まれ変わるタイミングかもしれません。被災後、周囲からの評価は高いものの、職員の中には消えないトラウマもある。地震で一度壊れ、必死にさがり取り戻そうとしているが、困難なことも少なくありません。もう一度、“職員が誇れる病院とは何か”を見つめ直すべき時ですね。今年は、それを高く掲げたいと思います。

こころと心のミュージアム

書二人展

この度益城病院に併設されています、犬飼記念美術館との縁で里帰りの書を展示することになりました。

生まれ育った熊本はいつも私の心に強く焼きついています。仕事で東京にいても休みがとれると熊本の地を訪れていました。その熊本が大地震。かつて経験した事のない災禍に苦しんでおられる方々を見るにつけ、一日も早い復興を願っております。再建にはまだまだ時間がかかるようです。私にも何かお手伝い出来ることはないかとメンタル面での癒しには絵画や音楽なども効果があると聞き、それでは書も良いのではと、永年籍古に励んでいる書の展示を思い立ちました。

一週間の短い期間での展示ではございますが、皆様方へ癒しを一時でも感じて頂ければ幸いです。

坂倉由江（熊本妻）
坂倉基彦（夫）

会期 二〇一七年十一月七日～十二日



優しい文字と書の楽しさ、癒しを教えてくれた坂倉由江氏と基彦氏ご夫妻と犬飼理事長
左／坂倉基彦（号：坂倉千由：せんらい）、右／坂倉由江（号：坂倉蓉飛：ようひ）夫妻と
犬飼理事長。優しい文字と書の楽しさ、癒しを教えてくれた両氏は、ともに師範で2014
年、三駉書道会・金敷駉房先生に師事。毎日書道展入選、創玄展 入選など多数実績あり

何度も展示を見に来る職員達からパフォーマンスを頼まれて、大きな筆で書く夫妻。活筆の見事さに全員驚く。1週間の期間中訪れた約400名の来館者の中には、癒されたと涙する人も





木簡…全て基彦氏の手作り。木片を切り揃え、漆をかけ、文字を書き、麻縄で編んだ貴重な作品で、紙がなかった古代の書類



貴重な和紙を使い、抑揚の取れた文字とセンスある額縁がさらに印象を深めた漢詩や近代詩



ドイツから取り寄せた皮の手作り額と古紙



寸松庵色紙や堤中納言集の和歌。流れるような文字と巻物



との粉*で磨いて隷書の一文字をあしらった檜の升をピラミッド型に展示。手前は反故紙を立方体に手作りした置物を、これもピラミッド形にして展示したおもしろい企画
※との粉…石を細かく砕いた粉

第7回院内学会 ～今、私たちにできること～

明日のために！

患者さんのために何ができるかを考える



院内学会プログラム

- 講演 宮崎知博 診療部長**
「うつ病とネガティブ・ケイバビリティ」
・2病棟 **工藤弘美 病棟長**
「在宅診療部の訪問を振り返って」
・1病棟 **土田和枝** 「高齢者のスキンケア」
・栄養管理科 **湯原陽子 主任**
「熊本地震を経験した患者の栄養状態の変化」
・事務部 **林田千香 係長**
「診療情報活用のためにできること」
・コスモ **岩谷優**
「社会生活能力の獲得を目指して」
・臨床心理室 **小松成子 主任**
「発達障害を背景に持つ統合失調症男性A氏への視覚的な心理教育を取り入れたカウンセリングの一症例」

特別講演

- 一般社団法人精神科領域の感染制御を考える会
代表理事 山内勇人 先生
「精神科における感染対策～特殊性と戦略、そして情報発信～」
・3病棟 **芦原正和**
「多飲症患者へ心理教育を用いたアプローチとその効果」
・作業療法室 **木戸拓郎**
「多飲症患者との関わりを通して、アプローチについて考える」
・橋病棟 **輪池賢宏**
「アスペルガー症候群患者の精神症状悪化予防方法の検討」
・在宅支援部 **増田なみ子 副部長**
「被災地支援の活動報告」

回を重ねて充実する院内学会

看護部長 水田 由紀

2017年10月14日、第7回院内学会が開催されました。学会を一日がかりで行い、演題発表の他に院内・外の講師による2つの講演会を入れ、職員のレベルアップを図る機会となりました。

特に、当日は、熊本地震からちょうど1年半の節目の日でもあり、佐伯保養院の山内先生には、体験をもとに震災と感染対策についてお話いただきました。宮崎診療部長は、うつ病とネガティブ・ケイバビリティについて

講演され、お二人から元気と勇気を頂きました。そして、演題発表では、震災後の自分の気持ちを整えながら、患者さんのために何ができるかを一生懸命考えてきた職員の姿がありました。

一題一題が私たちの財産です。回を重ねることでスムーズな運営と、院内の関連部署からも発表が行われるようになり、他部署の知らないことへの発見も多く、実り多いものになっています。

地震災害と感染対策の体験から

社会医療法人敬和会 佐伯保養院 副院長 山内 勇人

私は、先般の熊本地震でも南阿蘇村にて感染対策に従事しておりました。

精神科病院での感染対策のノウハウは、人的・経済的により厳しい認知症などの高齢者施設、さらには、長期的な感染対策が必要な被災地避難所運営にも有用でした。筆者は2011年の東日本大震災時の宮城県気仙沼、2016年4月の熊本地震での南阿蘇村と被災地避難所での経験を通して、そのことを実感したところです。

被災地避難所の感染対策の特徴として、①集団での感染管理であること、②生活を伴う長期的な対応を要すること、③感染対策の専門家が乏しい状況にあること、④医学的基礎知識を持たない人達を対象とした指導や実践の場であること、⑤限られた資源の中で「ここにあるもので、どこまでできるか」という“ブリコラージュ”の発想が重要であること、⑥その場その場に応じた実践的対策が求められることなどが挙げられます。

避難所での生活が見える組織として、食事や清掃等の避難所を運営する一般行政職員、ボランティア、住民の代表等を交えた感染対策組織を立ち上げ、大きな効果を得ました。

感染者の「隔離室」も、一般の人の言葉の印象から、皆で話し合い「保護室」としました。さらに感染解除となって集団に戻る際には、「皆のために不自由を辛抱してくれたこと」を皆で共有し、戻って来た時には、「ご苦労様」「ありがとう」と拍手で迎えようと話し合い、感染への“偏見”の払拭に努めました。

このような現場に、当院精神科で実施している「フェーズ別対策」を導入することで、多くの支援者が出入りする現場や、刻々と変化する状況にも対応できました。集団発生時の抗インフルエンザ薬の予防内服に関するプロトコルは、避難所でもそのまま運用可能でした。また、医学的知識を持たない一般の人たちへの感染対策への協力依頼は、平易な言葉で実践を交えながら伝え、お互いを守る“思いやりのマナー”として協力をお願いしましたが、これは精神科に入院中の患者さんに、平素より当院の看護師が行っている手法です。

* 山内勇人氏は、精神科領域における感染対策において全国的に活動し、精神科に特化した感染対策の領域を確立するため、「精神科領域の感染制御を考える会」を2008年12月に立ち上げ、2017年9月には一般社団法人化して代表理事に就任しています。



この頃つらつら ～ネガティブ・ケイパビリティの背景から～

医師 宮崎 知博



このReborn冬号が出る頃は新しい年を迎えていよう。解体が進み更地が目立っていた土地にも、新しい住宅やアパートなどが増えてきた。それでも未だ仮設住宅などで暮らし、元の自宅に戻れない多くの人がいる。

女友達と言ったら怒られそうなKさんだが、彼女は「何も変わらないと思っていた日常が一瞬にして変わり果て、先の見えない不安定な中、本当にこれでいいのかな…という不自信が自分にまわりついた」と話していた。それを救ってくれたのは阿蘇の大自然、阿蘇での生活の営みだったそうだ。壊したものが自然なら、それを癒してくれたのも自然ということになるが、そんな故郷を持つ彼女に、私は少しばかり羨ましさを感じる。

思うようにいかないのが日常と言っているだろう。医療の世界に身を置いてからほぼ40年が経つ。我ながら、もうそんなになるかと遅まきながらの感慨を持つ。精神科を選んだから余計にそう思うのかもしれないが、招かれざる出来事は次から次にやってくる。中には、すぐにはどうこうできない問題を抱えている人も多い。

解決しない状態が続くと、やり残した宿題のようにその事が頭の片隅に居座ってくる。その中で自分を見失うことなく日々の生活を恙なく送っていく、そんな魔法の薬はある訳無いのだが、人は幾つかの方法を自分の中に育んで、その助けを借りながらやり繰りをしているのだろう。

院内学会で話した「ネガティブ・ケイパビリティ」（帚木蓬生著）は、書店で何気なく目に入ってきた緑溢れる表紙に惹かれ購入した。そこには「どうにも答えの出ない、宙ぶらりんの状態に置かれても、それに耐える力」の大切さが書かれていて、“なるほどな”と腑に落ちる所があり、付け焼刃ながらみんなにも話したという次第だった。読んでこれは何かに似ているなと思ったのが、森田療法で言う「あるがまま」だった。次に“そういう生き方をした男がいたな”と頭に浮かんだのが、脊椎カリエスの痛みに耐えながらも34年の生涯で短歌・俳句の革新をやったのけた正岡子規だった。帚木氏には「生きる力 森田正馬の15の提言」がすでに著作としてあり、その中で森田が子規のことをしばしば取り上げていたことを知った。

さて最近、地震で自宅が全壊したFさんから、「先生、梅干し食べるね、色はあんまりようなかばってん」と話しかけられ、もちろん、有り難く頂きました。故郷・同僚・友人・家族・言葉・運動といったセイフティ・ネットワークを、つらつら考えているこの頃である。

岩宮恵子先生による継続的な心理支援

～語らい、そして学びの場へ～

臨床心理室 主任 小松 哉子

震災は、時間の経過とともに、日常生活の中に取り込まれています。小さな揺れに瞬時に身構え、傷ついた大地に気分は沈みますが、あの時よりも色々な思いを抱え、今、そして、これからを考える時間が増えています。

島根大学教授の岩宮恵子先生には、4回の病院訪問で継続的にご支援を頂いています。今回は、事例や箱庭療法の症例を通して、治療者－クライアント間の心理的な理解を深め、非言語的な世界を丁寧に読み取り、みんなでコミットメントする場となりました。箱庭療法の展開には、言語を介する以上に、イメージの拡がりによる治療的な意味合いがあり、今後、子どもに限らず幅広い活用ができると感じました。その経験は、新鮮な驚きと同時に、腑に落ちる感覚と充実感をもたらし、心理士であることを再確認する機会ともなりました。

これまで震災直後の語らい、非常事態での心理職の立場や役割、思春期の子どもやその関連機関とのかかわり方、新しい箱庭療法の



提供と事例検討会と、支援していただいた内容は復興の歩みとともに変わってきました。そして心の復興に寄り添う出会いは、回数を重ね、共に心理士として歩むための力添えとし、私たちを鼓舞する場となっています。今年も2月に来院していただく予定で、語らい、そして学びの場として、展開の兆しを感じます。

私達も動き出しています。今、経験しているこの回復の過程を、しっかりと次につなげて行きたいと思います。今後ともよろしくお願いします。

*岩宮恵子 臨床心理士。島根大学医学部精神科での臨床等を経て、島根大学人間科学部人間科学科心理学コースの教授となる。専門は臨床心理学、思春期臨床等。著書多数。

講演会「震災後の心のケアについて」を開催して



2017年11月18日、松永哲夫院長が、益城町保健福祉センター「はびねす」で講演会を行いました。益城町地域支え合いセンターと地

地域活動支援センターアントニオ 主任
山迫 浩史

域活動支援センター・相談支援事業所アントニオの合同企画として催したものです。講演では、回復には物理的なサポートより感覚的なサポートが重要であることと、皆がそもそも持っているレジリエンス（回復力）増長のポイントを話されました。最後には多数の質問があり、盛況に終わりました。

災害に
負けない
病院へ

日本精神科救急学会

災害拠点精神科病院機能訓練に参加して

副院長 渡邊 信夫

2017年11月2日、3日の両日、金沢市で第25回日本精神科救急学会学術総会が開催されました。2日目の午後、「大災害と拠点病院～その時あなたはどう動く～」と題して、教育研修が2時間あり、当院から犬飼理事長、佐伯課長、山迫主任、小田看護師と筆者の5名が参加しました。

昨年の熊本地震の際には、当院を含め、被災した精神科病院から595人の患者が他の病院へ搬送されました。今後想定される南海トラフ地震等の大規模地震においても、多数の精神科患者の搬送、受け入れが必要となる可能性があります。今回の研修では、30名の患者が搬送されてくるという想定で、受け入れ

病院としてどう動くかというシミュレーションを行いました。刻々と伝わってくる情報を受けて、通常業務を変更し、搬送されてくる患者に対応す



る人員、場所を確保し、院内の指示系統を作り、院外の関係機関と情報交換をする必要性を学び、これらを短時間に決定することの難しさを感じました。熊本地震の経験もあり、緊迫感を持って研修を受けることができました。

当院はこれからも、災害精神科拠点病院、災害派遣精神医療チーム（DPAT）等に積極的に取り組んでいきたいと考えております。



◀状況は刻々と変化するため、情報収集と対応する柔軟性が求められる



◀情報共有が、組織の対応力と機動力に大きく影響する



↑（左から）山迫主任（PSW）、佐伯課長（事務）、犬飼理事長、DPAT事務局 河瀬譲氏、渡邊副院長、小田看護師

災害に
負けない
病院へ

緊迫した空気の中、 真摯に取り組んだ災害訓練

法人事務局課長 佐伯 貴志

被災後、BCP災害対応マニュアルを整備し、新たに設置された防災委員会で災害への備えについて議論と検討を重ね、南海トラフ地震を想定した災害訓練を実施しました。

2017年11月2、3日、精神科救急学会内で行われた「災害拠点精神科病院機能訓練」を参考にし、職員への一斉メール配信、本部の立ち上げ、グルーピング、状況把握およびEMISS入力、被災病院からの受け入れ体制など、課題形式で進めました。訓練が成り立つのか不安でしたが、一人一人が、被災時を思

い起こさせる緊迫した表情で意見を交わしながら、真摯に取り組む充実したものになりました。

二度と経験したくはないですが、想定外の事態は起こりえます。しかし、備えておくこと、また繰り返し訓練することで、初動と、場面に応じた動きや考えが自然に身につくと思います。今回の課題をもとに、当院のBCP災害対応マニュアルの検証と見直しを図り、万が一の事態に対応できるよう継続して努めてまいります。



↑犬飼理事長が災害対策本部長として、本番ながらに陣頭指揮



↑続々と集まる情報をすばやく整理し、漏らさず書き出していく



↑訓練終了後に非常食の試食をしました



↑グループごとに現状を把握、課題を検討し、対策を立てる



↑全部署から総勢110名が参加、熱気あふれる訓練となりました

クリスマスバイキングの裏側に潜入!!



西島料理長と最終打ち合わせ



10:00 ツリーの前に全員集合!
がんばるぞ〜!



9:45 栄養管理科スタッフと、サポートのホームラン・システムズスタッフで、念入りにミーティング

春の「おひな様」から冬の「クリスマス」まで年4回、季節の行事に合わせた豪華料理が大好評のランチバイキング。スタッフ一丸となって取り組む栄養管理科の舞台裏に密着し、井上さとみ科長にお話を聞きました。

食べる喜びは
生きる喜び!

患者さんと職員の笑顔が
何よりの励みです。

1995年、病院のリニューアルに伴って理事長の発案で始まったランチバイキングも、今年で24年目。当時は他に例がなく、ホテルのバイキング料理を視察したり

什器を一つ一つ買い揃えたりしながら工夫を重ねてきましたが、回を追うごとにメニューも洗練されて人気が高まり、今では益城病院の名物の一つとなっています。

バイキングの準備は、当番が作った担当表を中心に、約1ヵ月かけて進められます。通常業務をこなしながら、空いた時間を使って各スタッフが料理や飾り付けのアイデアを出し合い、料理長と何度も打ち合わせをします。大量の食材や食器の準備はもちろん、当日、朝食の配膳を終えてからバイキング開始まで、3時間余りで約350人分の料理を作る厨房は、目の回るような忙しさ。それでも、楽しみに待っている患者さんたちを喜ばせようと、スタッフの顔は輝いていました。「食事は栄養を摂ることだけが目的ではなく、生きる力の源」と語る井上科長。「病院の移転が決まり、ここでバイキングができるのもあと数回。心を込めて、最後まで皆さんに楽しんでいただきたいと思います」。

立候補で当番となった増田美沙さんと宮崎佳子さん。1ヵ月前から準備を進めてきました

12:00 さあ、いよいよ患者さんお待ちかねのバイキングが始まります

飾り付けも栄養管理科スタッフの手作り

~MENU~

カレードリア
鶏のから揚げ
サツマイモのポタージュ
ピザ
田楽
カルパッチョ
エビ入りサラダ
クリスマスケーキ
飲み物 (ココア・レモンティー)

13:00 患者さんの「おいしかったよ」の一言が、スタッフの励みに

おかげさまで、今年のクリスマス・バイキングも大盛況!

『外来機能と地域活動検討グループ』の取り組み

看護部外来 主任 高橋 富陽

「益城病院将来ビジョン」を受け、外来診療と地域支援の2つの観点から検討しています。

外来機能では、心の健康を支える専門職として、医療の提供はもちろん、医療スタッフによる手厚いケア・ケアと安心して治療が受けられる環境作りを目指しています。現在は、院内の多職種連携チームによる支援の強化と、利用者や家族等が治療の選択や見通しを持つためのフローシートの作成を行っています。また設計では、外来のみならず、院庭など癒しの空間の提案等を行い、受診しやすく心のより所となる環境づくりに努めています。

地域活動では、震災を機に、利用者が地域に溶け込んだ生活ができるための様々なサポートや、地元の方が気軽に相談にいられる場所を提供できる、地域に根ざした病院でありたいと強く感じています。その手始めとして、公民館での出前講座、認知症カフェ、仮設団地のサロン活動を通じて健康教室を行っています。2020年に向けて、外来機能の強化と地元の皆様に役立つ病院づくりを目指します。



外来診療機能について自分たちの想いを描きながらミーティングする様子

職場インフォメーション

第3回 看護部 急性期治療病棟

スーパー救急に向けて

橘病棟長 山下 義晴

橘病棟は、スーパー救急取得を目指し取り組んでいる最中です。病棟には色々な課題を一つずつ克服していく力、漠然としたものを現実のものとしていく力を持っているスタッフが揃っています。さらにモチベーションを上げ、いい雰囲気患者さんを看護できる環境づくりに努めていきます。

スーパー救急は、病室半数以上が個室で構成されるため、質の高い集中的な医療・看護を行



うことができます。私達は、患者さんに、より早く元の生活に戻っていただけるよう、退院前訪問や他部署連携に力を入れていきます。また、退院しても患者さんや家族が不安を抱かない支援体制づくりも必要となってくるでしょう。医療だけではなく、福祉や介護も視野に入れたチーム医療を目指します。

研

修

と

院

内

勉

強

会

院 内

10月	6日	不眠症／C型肝炎インターネット講演会（医局）
	12日	不眠症インターネット講演会（医局）
	26日	大塚製薬web講演会（認知症とてんかん）
11月	17,20,21日	行動制限最小化、個人情報委員会合同研修会（全職員）
	24日	認知症対応強化委員会勉強会
	27～12/1	院内感染対策職員研修（全職員）
12月	6,8,11,13日	医療安全職員研修（全職員）
	9日	熊本東部地区看護師レベルアップ研修

院 外

10月	4,11,18,25日	くまもと青明病院mECT研修（渡邊鮎子）
	7日	世界アルツハイマーデー講演【講演：犬飼邦明】／熊本パレオホール
	7日	第52回熊本県精神保健福祉士協会定例研修会（5名参加）
	11～13日	精神科病院における安心・安全な医療を提供するための研修（金子元子）
	12～13日	第6回日本精神科医学会学術大会シンポジウム（犬飼邦明、他2名参加）
	20日	熊本県精神福祉大会（梅田亮一）
	21日	熊本県看護協会「災害看護」研修（坂井誠、江邑由香里）
	21日	日本精神科看護協会「薬物療法」、「行動制限最小化看護」研修（山下義晴）
	21日	第5回宮崎県支部研修会（榮永紘之）
	22日	第16回熊本アディクションフォーラム研修（3名参加）
	25日	日本精神科看護協会熊本県支部研修会（福溝小百合）
	26日	平成29年度自立支援型ケアマネジメントに向けた地域ケア会議研修（本田千代美）
	27日	神奈川県精神科病院協会講演【講演：犬飼邦明】／横浜ロイヤルパークホテル
	27日	精神障がい者社会復帰支援研修会（宗雲美樹、無田千穂）
	30日～31日	平成29年度熊本県主任介護支援専門員研修（福島ひろみ）
11月	30日～11/2	認知症高齢者対策研修（榮永紘之）
	2日	第25回日本精神科救急学会（犬飼邦明、渡邊信夫、他2名）
	3～5日	第51回てんかん学会学術集会（宮崎知博）
	6～9日	包括的暴力防止プログラム研修（坂井誠、森慎也）
	7日	熊本県精神科病院協会看護部会管理者研修（水田由紀）
	7日	熊本県保健師研修会（古澤春美）
	10日	平成29年度成年後見制度利用促進研修会（宮田啓子、東祐介）
	10日	九州電力職員講演会【講演：松永哲夫】／九州電力天草配電事業所・営業所
	13～17日	平成29年度第2回アルコール依存症臨床医等研修 看護師課程（伊津野智士）
	17日	大塚製薬主催エビリファイLAIを臨床応用するin熊本研修会（岩佐二郎）
	18日	DPAT研修会【講演：犬飼邦明】／兵庫県こころのケアセンター
	18日	地域向け講演会「震災と心のケア」【講演：松永哲夫】／益城町地域支え合いセンター
	18日	「看護記録の基礎」上益城宇城支部共催研修会（3名参加）
	24日	福祉サービス苦情解決研修会（園田烈）
	24日	熊本精神科病院協会「事務長会」研修会（6名参加）
12月	25日	日本精神科看護協会熊本県支部「発達障害のライフステージを考える」研修会（福溝小百合）
	25日	平成29年度第33回熊本アルコール問題学会【講演：松永哲夫】／益城町文化会館ホール
	26日	平成29年度熊本県かかりつけ医等発達障がい対応力向上研修会（西尾啓）
	29日	栄養士会御船支部研修（湯原陽子、宮崎佳子）
	2日	第53回熊本県精神保健福祉士研修会（8名参加）
	2日	自立応援プロジェクト人材育成研修会（本田千代美）
	4～6日	日本精神科病院協会主催「シニアコース」研修（山田加代）
	5日	平成29年度熊本県精神障がい者地域移行支援研修会（3名参加）
	6日	日本精神科看護協会熊本県支部「CVPPPトレーナー」研修会（3名参加）
	8日	平成29年度障害支援区分認定調査員（スキルアップ）研修会（永野健太郎）
	12日	平成29年度熊本県地域支え合いセンター管理者研修（山迫浩史）
	15日	日本精神科看護協会熊本県支部「倫理について」研修会（福溝小百合）
	15日	福井県DPAT研修及び福井県松原病院講演【講演：犬飼邦明】／松原病院
	22日	災害看護研修（金子元子）
	26日	平成29年度熊本県サービス管理責任者研修及び熊本県児童発達支援管理責任者研修（高野聖子）
	26日	上益城郡学校給食調理職員研修会【講師：井上さとみ、田中美奈】／山都町矢部保健福祉センター千寿苑

※他にも院内外でさまざまな研修・勉強会等に参加しています。

コレクション歴23年、時計への愛は現在も進行中!

地域活動支援センターアントニオ 主任 山迫 浩史

私は収集癖があつて色々集めてしまいましたが、コレクション歴が長いのは腕時計です。10歳頃にはデジタル時計に友人の電話番号を入力したり、中学生の時には、気温が計れる時計で意味なく周囲を計り、よく自慢していました。高校ではG-SHOCKを愛用していましたが、流行前で良さが伝わらず、「何?そのデカイ時計!」と言われていました。大学になるとバイトをして集めてい

ましたが、今は妻帯者となり、私の趣味も徐々に規模縮小せざるを得なくなっているのが、ちょっと残念です。



職員往来

2017年10月2日~2017年12月31日

採用 よろしくお祈いします。

① 趣味・特技 ② 入職動機 ③ ひとこと

クボタ ユキコ
久保田 由紀子

2017年11月1日

1病棟
看護師

- ① 音楽鑑賞
- ② 外来の付き添いで来院した際、良い雰囲気だったため。
- ③ 新たな気持ちで沢山学んで行きたいと思ひます。よろしくお祈いします。

ニシ ヤヨイ
西 弥生

2017年12月5日

1病棟
介護福祉士

- ① 読書・ドライブ
- ② 介護職から10年以上のブランクがありましたが、復帰したくて志望しました。
- ③ 大変なこともあるかと思ひますが頑張ります。

ドバシ ユキコ
土橋 由起子

2017年12月11日

ふるさと
介護職

- ① イラスト・似顔絵描き
- ② 明るく、清掃が行き届いているところに好感を持ちました。
- ③ 精一杯頑張ります。くまモンの絵や似顔絵が得意なので、お手伝いさせていただきます。

退職 お疲れ様でした。

吉 永 衣 里	2017/10/20	介護福祉士
宮 岡 葵	2017/10/31	調理職
上 野 美 由 紀	2017/12/1	介護福祉士

研修医 お世話になりました。

光 浦 智 証	2017/11/6~2017/12/1	済生会熊本病院
---------	---------------------	---------

2017年10月~12月 病院等行事

10月	1~31日	接遇推進月間(挨拶・言葉使い・態度・身だしなみ・人権の尊重)
	2日	辞令交付式
	3~11/5	「宮崎珠太郎展~竹に生きるこころ」/犬飼記念美術館
	14日	平成29年度第7回院内学会
	19日	バイキング給食
11月	25日	宿泊型自立訓練所「コスモ」避難訓練
	27日	シートベルト着用バトロール
	1日	新入職員辞令交付式・新人研修
	7~12日	「書二人展」~坂倉蓉飛・坂倉千鶴作品展/犬飼記念美術館
	14~12/24	「水野ヒロシ写真展~石」/犬飼記念美術館
12月	25日	大規模災害訓練
	25日	病院長杯(職員)グラウンドゴルフ大会
	14日	クリスマスバイキング給食
	15日	季節行事「クリスマス会」
	21日	みんなで取組む院内・院外清掃活動
	26~2/4	「世界の風・日本の風 天まであがれ~船崎直一の風コレクション」/犬飼記念美術館

実習生受け入れ実績

10月	アントニオ/九州ルーテル学院大学PSW実習(1名)
11月	健味健康園実習/熊本県立松橋西支援学校高等部上益城分教室(1名)
12月	早期臨床体験実習/熊本大学(1名)

診療実績

単位:人

区 分		10月	11月	12月
外 来	外来患者延人数	3,055	2,928	2,932
	(うち新規患者人数)	51	48	43
	平均外来患者人数	138.9	133.1	139.6
入 院	新入院患者人数	30	26	38
	退院患者人数	30	24	33
	在院患者延人数	6,230	6,034	6,344
	平均入院患者人数	201.0	201.1	204.6
	平均在院日数(単位:日)	207.7	241.4	178.7



今年もよろしくお願いします。2018年1月4日年頭式典にて



MASHIKI HOSPITAL

社会医療法人ましき会

益城病院

精神科・心療内科・小児科・歯科

〒861-2233

熊本県上益城郡益城町惣領1530

☎ 096-286-3611

外来お電話受付時間(月曜～金曜)

午前 9:00～12:00 午後 13:30～17:00

編集後記

年頭の式典で理事長・院長から「よかボス宣言」がなされました。職員の仕事と生活の充実を応援するボスたちの言葉。さあて、各人がどんな働き方をして余暇を生み出すのか？楽しく取り組みたいものです。復興半ばの益城ですが、本年も、ご支援よろしくお願いいたします。(田中洋子)



付属施設

- 熊本県認知症疾患医療センター
- 高齢者グループホーム「ふるさと」
- 地域活動支援センター「アントニオ」
- 訪問看護ステーション

- 居宅介護支援センター
- 就労継続支援B型事業所「健味健食園」
パン工房まりも・農園グリーンサム
軽作業 あひるのしっぽ

- 宿泊型自立訓練事業所「コスモ」
- 育児室「あんふあん」
- 犬飼記念美術館
「ところと心のミュージアム」

関連施設

- ひろやすクリニック 内科・消化器科・循環器科
熊本県上益城郡益城町惣領1544番地3
TEL 096-286-3636

- 特別養護老人ホーム 花へんろ
熊本県上益城郡益城町惣領1670
TEL 096-287-8706

- 養護老人ホームAKAI花へんろ
熊本県上益城郡益城町赤井1800
TEL 096-286-2075

益城病院

検索

表紙タイトル: Reborn(リボーン) 新しく生まれ変わること。 表紙写真: 英彦山から望む初日の出

撮 影: 福島沙緒里 編 集: 堀地久美子 発 行: 社会医療法人ましき会 益城病院 広報委員会 発行日: 2018年1月29日